

## 緒言

木下千花

ここにお届けするのは、『左岸：京都大学映画メディア研究』の創刊号である。「創刊」とはいえ、本誌は『CineMagaziNet!』のスピリットを継承している。言うまでもなく、『CineMagaziNet!』は京都大学大学院人間・環境学研究科を拠点としたオンライン学術誌であり、1996年の創刊以来、2019年度発行の第22号まで日本の映画研究を文字通り牽引した。映画批評家の真似事をしながらも、東京大学の駒場キャンパスでなんとか「論文」を書こうと四苦八苦していた私は、1997年からアメリカに留学し、まさに「外」から『CineMagaziNet!』に掲載された綺羅星のごとき論考を読んで眼をみはり、少なからぬ嫉妬を覚えたものである。『CineMagaziNet!』には今後もオンラインでアクセス可能なので、故・加藤幹郎のもと揺籃期にあった日本の映画研究の熱気を、その後クラシックとなった議論の青写真を、ぜひ発見し続けていただきたい。

『左岸』は明らかに異なった歴史的な文脈のなかにある。2021年現在、映画メディア研究はアカデミックな学問領域として確実に地歩を固めつつある。『CineMagaziNet!』でデビューした京大人環の俊英たちは、全国の大学で研究者養成にあたり、あるいは国立映画アーカイブで映画の修復・保存の指揮を執り、日本映像学会、日本映画学会、表象文化論学会などの運営を担い、さらにこれら学会の機関誌の編集・査読に携わって、映画メディア研究を支えている。一方、吉田南キャンパスにあっては、『CineMagaziNet!』の編集を担った松田英男が2019年度をもって退職し、後任として仁井田千絵が着任したが、2016年着任の私と同様、京大出身者ではない。こうした歴史的経緯を経て本誌が目指すのは、鴨東（鴨川の東側＝左岸）にあって大学の研究室紀要としての役割を果たしつつ、それを通してフィールド全体へと貢献することだ。

そのため、京都大学映画メディア合同研究室の学生と教職員の研究成果を発信することを目的としながら、いささかの矛盾を怖れずに言えば「開かれた」紀要（internal journal）たらしめている。具体的には、外部査読を積極的に依頼し、編集にあたっては校正と組版は編集者において、ISSNも取得している。第2号からは、大学院生シンポジウムと連携し、基調講演を出版するとともに、発表者に投稿資格を付与してゆく所存である。

